

牛と共に働く

公益財団法人 中国四国酪農大学校 酪農科 1年 竹中 彩香

自分が好きなことを仕事にしたい！それが私の酪農を学び始めたきっかけでした。

私の実家は広島県三原市というところにあります。「お隣の家は500m先」というような、自然に囲まれた土地で暮らしながら、小さい頃から米や野菜作りを手伝っていました。春にはたけのご掘りをし、夏にはカブトムシを捕まえに山に入り、秋には稲刈りをし、冬には雪合戦をする…そんな大自然の恵みや生命に囲まれた日々をこれまで過ごしてきました。そのためか、気づいた時には「自然や生命に関わって暮らしていきたい」と子供ながらに漠然と考えるようになり、徐々に「畜産をしたい！」と思うようになっていました。そこで、高校は県内の農業高校の畜産科に進学し、卒業後はお隣の岡山県にある中国四国酪農大学校に進学しました。

私は高校で人生初めて牛に触れました。最初はただ、「かわいいな…」それだけしか思いませんでした。しかし、その後、酪農専攻班に入り、今までより乳牛のそばにいろいようになつてから、AI、ET、分娩、病気、手術、怪我、共進会…いろいろなことに立ち会う機会が増えました。すると、「かわいい」という感情だけでなく、「もっと牛について学びたい、知りたい」と思うようになりました。この頃から自分で牛についての本を読んだり、バイオテクノロジー講座に参加したりして、牛についての新しい技術などを積極的に学ぶよう努力しました。少しずつですが、知識はつけてきたつもりです。…いえ、正しく言うのなら、“文面上”の知識をつけてただけでした。本や座学からの知識をつけていくうちに『酪農』の根本的なことを忘れていることに気づかされました。

牛は経済動物である前に、偶蹄目ウシ目ウシ亜科の動物です。そして酪農は乳牛が草などを食み、乳を作り、人間と牛が共同で乳を出して搾る農業です。牛がいなければできない農業です。牛という“生命”とそれを支える“自然”がないことにはどうにもできない職業です。

私は生命と自然に囲まれて暮らしたいと望んでいたはずなのに、いつの間にか牛に触れずして文面だけで理解しようとしていました。その時に気づきました、牛のことについて本当に理解したいのなら実際に牛に触れなくてはわからない、と。

そのことに気づいてからは、農場によく足を運び、牛に触れる機会を増やすように努力しました。たとえば、腹の張り具合でおなかいっぱい食べているとか、足や首にこすれて毛が薄くなっているところがあるのは、そこに負担がかかっているとか、糞の状態で体調を判断するなど、やはり文面だけではわからないことをたくさん知ることができました。そして、この牛は今何がしてほしいと感じているのか、この牛はどこが悪いのかなど、牛から発せら

れるシグナルを少しずつ感じられるようになってきました。

そのうちに、酪農をするにあたり大切なことは、牛の状態を把握し、牛がストレスをできるだけ感じることなく、快適に、安全に暮らせるように環境を整えることであると思うようになりました。それから、将来実際に自分自身が酪農をするときには、牛の快適性「カウコンフォート」に重点を置いて飼育していきたい!と強く思うようになりました。

カウコンフォートとは、「乳牛の快適性」という意味です。要するにできる限り乳牛のストレス要因を取り除き、腹いっぱいエサを食べられるようにしてやることで、乳牛にとっての快適性が向上すれば、体の消化器系や泌乳器系の機能が自然と向上するというわけです。

このことを初めて聞いたとき、自分の今まで考えてきた、牛の事を第一に考えて牛が快適に暮らせる環境を作るということにマッチしました。

どこを改善させるのが良いのかということを考えた時、やはり大事なものは、牛の状況、牛から発せられているシグナルです。たとえば、牛の飛節の毛が薄くなっていたり、皮膚が見えていたり、腫れていたたりする場合は敷料が少ないもしくは牛床が固い、滑るということを訴えているということです。その場合の解決策はやわらかい敷料をたっぷり敷いてやることだと思います。また、繋ぎ飼いで立ったり座ったりする場合に立つのが苦しそうなときは、繋いであるロープが短いなどの原因があると思います。その場合の解決策はロープを長くすることだと思います。牛のストレスを考えれば、フリーストールなどの牛舎が理想的ですが、たとえ繋ぎ飼いであったとしてもできるだけ楽に牛が行動できる環境を作ることが大切だと思います。ほかに、牛が水をぺろぺろとしか舐めない場合は水槽の水が汚いということを訴えているということです。解決策はこまめに水槽内を掃除し、いつでもたくさんきれいな水が飲める状態にすると良いと思います。さらに、夏の暑い日に牛がぼーっとしている場合や、水槽の水で水遊びしている場合は、暑さでだれているというのを訴えているということです。その解決策は扇風機や送風機の設定を強くする、打ち水やミスト、遮光をするなどの暑熱対策をすると良いと思います。そして、飼槽のえさがなくなっている、牛の腹が膨らんでいないという場合はたくさん食べられていない、もしくは牛の好きなリズムで食べられていないということを訴えているということです。解決策は飼槽にいつも新鮮なエサをたっぷり置くことが必要です。

このような条件を整えてやると、牛はいき食いをせず、自分のリズムで飼料を食べるようになり、ストレスをあまり感じず暮らすようになり、牛は機能が向上し、人間は牛の病気が減少、治療費が減少、乳量増加で収益が増加…結果的に牛も人間も良いことが待っているというわけです。

これは牛にとっても人間にとっても良いことです。しかしここで考えなければならないのは、酪農というのは「産業」であるため、牛の快適性のみを追求するのではなく、利益や損失や

支出などお金の面も目を向けなければならないということです。いくら牛の好む飼料をたくさんあげても、牛が快適に過ごせるようにと牛舎設備にお金をかけても、利益が伴わなかったら赤字になります。そこで必要なのは、経営するための知識です。牛を飼うためには、牛の生態に関する知識、牛を見る観察力、バランスのよい収支を保つ経営力が揃わないといけません。

私の夢は、先に述べたとおり、できるだけ牛にストレスを与えずに飼育する「カウコンフォート」を重視した管理をし、きちんと利益をだし、牛と共に作り上げた「わたしたちの牛乳」を消費者にお届けすることです。できることなら、少しでも牛が牛らしく過ごせる環境を作ってあげたい…。そのために今、酪農に特化した専門学校で毎日牛に触れられる環境を与えていただいている学生のうちに、将来の事をしっかりと見つめ、考え、酪農や経営に関しての多くの知識、牛のそばで牛のシグナルをしっかりと察知できる能力、機械や道具をきちんと扱える技術を、自主的に、積極的に学び、養っていきたいと思います。

これからの将来の農業を担っていくことになる私たちの世代。農業の規模拡大化による農家の減少、TPPの参加による海外からの圧力、農業人口の高齢化、円安による輸入飼料の値上がりなどの様々な問題にも立ち向かい、温故知新を胸に日本の農業の維持、発展を目指して頑張ろうと思います。どんなに酪農を含め様々な農業が変貌を遂げようとも、生命、自然の恵みをいただいて私たちは生きているという恩を忘れることなく、胸に抱いて…。